歴史探訪

斜面環境
山の辺の道「6」
木曽路――「森と水」の力

中村 三郎
なかむらさぶろう
防衛大学校名誉教授・
地すべり学会顧問（理学博士）

写真-1「是より南　木曽路」の碑

1
はしがき

５月晴れの１日、伊那谷から中央アルプスをぶち抜き木曽谷へ抜ける「権兵衛トンネル」をくぐり抜け、中山道の風情を残す木曽谷を訪ねた。スケッチブックを抱え同行した小学生の子供たちは「山ばっかりだね！」などと話し合っていました。私はふ！ と島崎藤村の名著「夜明け前」の冒頭「木曽路はすべて山の中である……」という名文を思い出しつつ子らの会話を聞き流し、この子たちのよいスケッチの場はないものかなどと思いながら木曽の谷を移動しました。

中央アルプス西縁山麓沿いの木曽は、河川が谷を深く穿（うが）ち、その谷の両側には急な山腹斜面が発達し展望の開ける場が少ない。人々は狭小なる段丘面やわずかな山腹緩斜面を拓いて生活しています。一方、「木曽の谷には真木茂り」と謳われているごとく、豊かな森林資源由来の経済効果やその潜在力をも考えられます。昔ながらの歴史や風情、ユニークな産業とその技術などについて、気負うことなく推進してきた成果は、尽きることのない木曽路の「森と水」の力に由るところが大きいと考えます。

中山道はかつて京都と江戸をつなぐ主要な２大幹線の１つでありました。起点は日本橋、近江の草津で東海道と合流する道が「中山道」でありました。しかし古来「木曽路」の名称が中山道の代表であるかのごとく使用されてきました。

木曽路北縁の桜沢左岸には、ポツンと「是より南木曽路」という素朴な石碑が建てられています。石碑の裏には「歌ニ繪ニソノ名ヲ知ラレタル木曽路ハコノ桜沢ノ地ヨリ神坂ニ至ル南二十餘里ナリ」という説明があります。この先山の辺を囲む「御嶽・乗鞍・駒ヶ岳」などの名山の山容をどこで垣間見ることができるだろうかなどと思いつつ、北から南方向へ木曽路を移動しました写真-1。

2
漆工町と奈良井宿

木曽路北の端、最初の宿場が贄川宿（にえかわじゅく）であり、これより南方向へ約100㎞の馬籠宿（まごめじゅく）まで木曽路11宿がひっそりとたたずんでいます図-1。

贄川は東西両側に山が迫り、要害の地と考えられ、

図-1 木曽11宿マップ

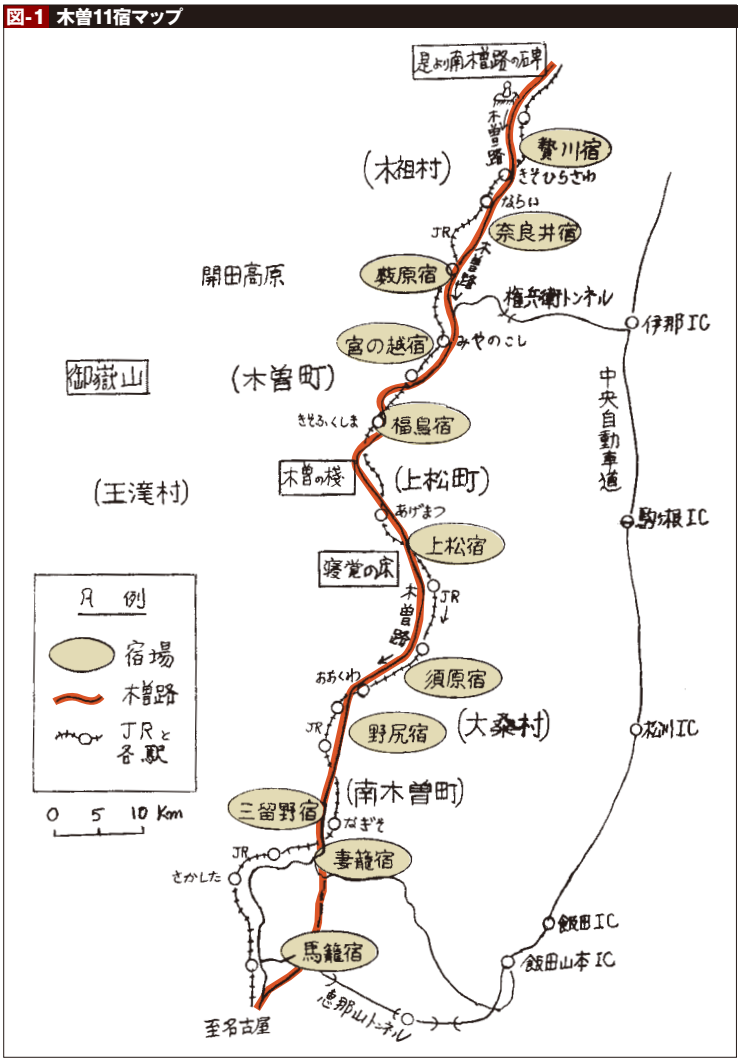


写真-2 奈良井宿の一部

この地形を利用した関所が設けられたのは戦国時代にさかのぼるとも言われております。また関所は明治２年（1869）までその役割を果たしてきたということであります[★1]。

贄川の南の平沢・奈良井地区は総面積の９割以上は真木茂る森林によって占められ、林木・気候条件に恵まれ、地域では500年来の漆器に関わる優れた技術が発展し、人々に親しまれてきました。贄川・平沢・奈良井は特に優れた漆器の漆工町地区として文化庁の指定を受け、ユニークな漆器技術の保存普及とその発展に大きく貢献しています。

木曽漆器に関わる最初の史料は、寛文５年（1665）の「檜物細工に漆を塗る」という記録があるということであります[★2]。今日平沢の南に接する奈良井は塗櫛を中心に発展してきました。また平沢はお盆や指物の拭き漆や春慶塗が主製品であります。

これらの技術を応用して、先年、長野における冬季オリンピックメダルの作製にも直接関与し、日本の伝統的工芸品としての名を高めています。地元の檜川中学校校歌の一部には「漆塗るわざをば受け継ぎ　長き歴史が今も息づく　桧の香も深く冴えた色艶……」などと歌い継がれ木曽路の誇りともなっています。

平沢の南に位置する奈良井宿は中山道すべての宿場のなかでも、江戸・明治時代の様相をもっともよく留めている宿場であります。江戸・明治の建築が60%を占めており、街全体が貴重な文化財であり、南の妻籠宿とともに文化庁の「伝統的建造物群保存地区」の指定を受けています。奈良井は当初街村形式であったが、時の経過とともに発展拡大し、一部は塊村化しています。また天保8年（1837）には大火に遭遇したが、天保14年には409戸、人口1155人と復活繁栄し、中山道中最も人口の多い宿場となっています[★3]写真-2。

3
木曽五木「森と水」の力

豊かな森林に恵まれた日本は、古来より生活のすべてにおいて木を利用し、独特な文化を創り上げてきました。「日本の森と木と人の歴史」[★4]によれば、弥生時代後期（AD.100～300年）以降木材の需要拡大、森林の伐採による山地の荒廃・土砂流出・洪水が発生しやすくなりました。さらに『續日本記』に記される701年（奈良時代）以降も木材の利活用が激しく、各地の森林荒廃事情にも大きな影響を与えました。木曽路も例外ではありませんでした。

その後の日本の森林を守った大きなきっかけ、そして木曽路との関わりの深さについて次のようなことが考えられます。永禄９年（1566）羽柴秀吉による墨俣砦における一夜城事件はよく知られています。その際、秀吉は木曽の美林約五万本を乱伐し、木曽川の流れを利用して流下させ、墨俣で組み建てて一夜で築城しま

した。時は移り徳川時代、木曽を所管する尾張藩士が見回ったところ、山地の大変な荒廃に驚き、山林の保護と育成に乗り出したと言われています。また尾張藩の上申もあり、幕府は寛文６年（1666）厳しい「諸国山川掟」を布令し、山林の保護を図りました。当時は安土・桃山（1568～1602年）の城郭時代直後で、材木の異常な需要もあったことから乱伐が繰り返され、山地は全国的に荒廃の著しい状態であったと伝えられています。しかし厳しい山川掟は、今日、日本の高い森林面積比（約70%）の保持に大きく反映しました。いわば木曽における「秀吉の置き土産」とでもいえると考えられます★5。

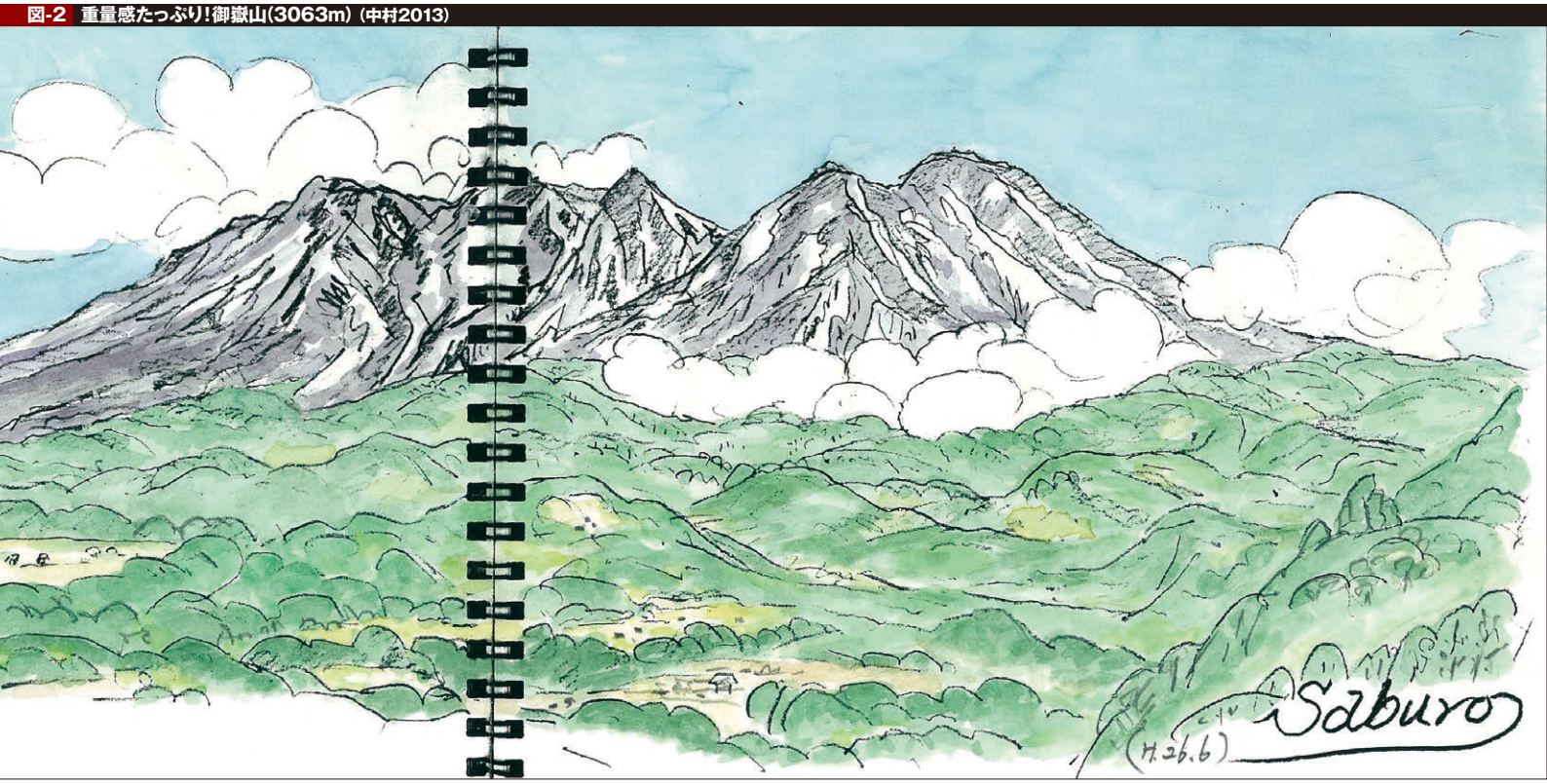
「停止木（ちょうじぼく）」とは「諸国山川掟」の運用に際して定められた大切な林木であります。木曽の場合は「木曽五木（檜・さわら・習檜（あすなろ）・槙（まき）・ねずこ」という五種の材木を言います。これらの木のうち１本でも伐採すると罪に問われるわけで、木曽の親子２人が停止木２本を伐採して、名古屋で２年間の入牢の罰を受けたことが伝えられています。しかしその後、家族の困窮の様子を見かねて、「村預け」等罰の軽減措置を尾張藩へ陳情したという庄屋と組頭の記録もあると言います。さらに岡山藩では、停止木１本の伐採で断罪されたというまさに「停止木一本首一つ」の厳しい例も報告されています★6。長年にわたるこのような厳しい山川掟、その運用効果は大きく、日本列島がモンスーン地帯に位置することも幸いして、現在の70%という森林の面積比に至ったのでしょう。これと比較して、フランス27%、ドイツ28%、イギリスは10%にすぎません。私たちの日常の「力」は身辺の豊かな木と水から来ているという実感、「停止木一本首一つ」という厳しい布令は、木曽路はもちろんのこと、日本列島の今日の緑豊かな森林と清らかな水を守ってくれたものと強く思います。

4
御嶽崩れ

「信濃国」★7という歌詞の一節に“四方（よも）に聳ゆる山々は　御嶽・乗鞍・駒ヶ岳……”とあります。この山々は木曽路にとって大切な固めであり、地域の人々にとっては心の拠りどころでもあります図-2。

1984年９月、この平穏な御嶽山麓と南信濃一帯を震撼させた「長野西部地震（M6.8）」が発生しました。村の人々は最初地震を感じたとき、東日本大地震ではないか……などと思ったそうであります。しかし、そ

図-2　重量感たっぷり！御嶽山（3063m）（中村2013）



「木曽ノ御嶽山ハナンジャラホイ、夏デモ寒イヨイヨイヨイ」（木曽節より）

の直後に襲った大きな揺れと構造物の破壊に接し、未曾有の大地震を自覚し対応したとのことであります。直下型地震ということもあり、王滝村を中心に瞬時に死者29名、被災家屋517戸が記録されています[★8]。御嶽山の８合目付近（2550m）の山腹では大崩壊、すなわち「御嶽崩れ」が発生しました。その規模は最大幅480m、最長1440m、深度150m、土砂量3600万㎥と報告されています[★9]。当時としては我が国最大規模の崩壊例と言われております。

崩壊地塊は岩屑流となって伝上川～濁川を流下し王滝川に至るまで、各所で森林や表土を削ぎ取り流走しました。王滝川との合流地点付近では濁川の岩屑流が王滝川を堰き止め、湛水延長2.7㎞、深水位22m、湛水面積0.33㎢の地震湖が出現しました。また、震源地に近い王滝村役場東の松越にて地すべり（長さ250m、崩壊幅150m、深さ最大35m、崩壊土砂量25万㎥）が発生し、主要県道と県道沿いの家屋が流下、このほか王滝川上流清滝地区における崩壊も記録されています図-3、4。

御嶽山８合目の崩壊について、井口・八木[★10]によると「崩壊は当初、標高1850m付近から2550mにかけての尾根型斜面において発生した」と報告していますが、この尾根はかつての旧い谷、あるいは凹地形部分を埋積した埋積埋没谷[★11]上の尾根型ないし緩斜面地形の一部であったということが考えられます。新期の堆積物よりなる尾根状・緩斜面地形の埋積埋没谷の基底部は、しばしば地下水の挙動域となりやすく、異状気象や直下型地震などに伴い、新規堆積物よりなる尾根地形部分や緩斜面部分等が大規模に崩壊するということも考えられます[★12]。

図-3 土砂流出分布(長野県木曽建設事務所　1986)

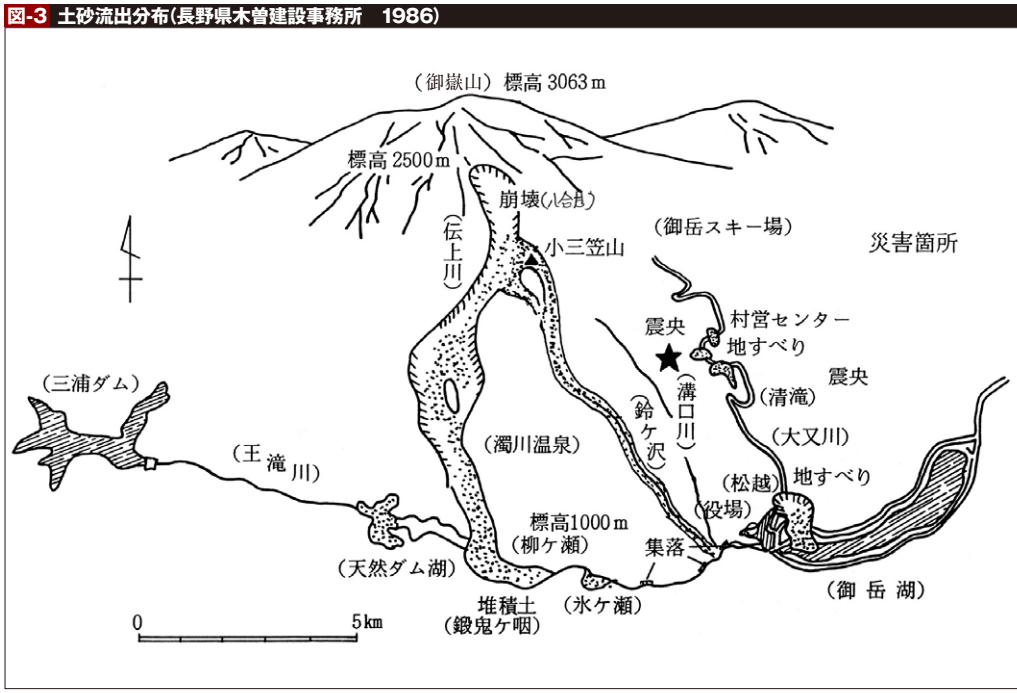
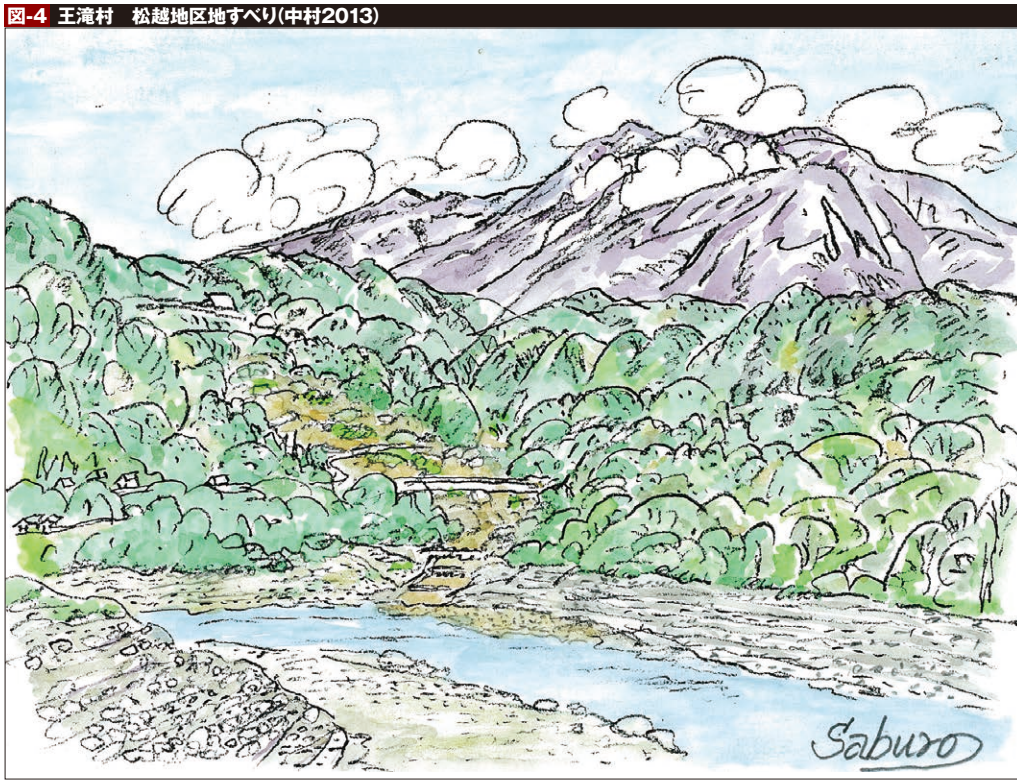


図-4 王滝村　松越地区地すべり(中村2013)



5
木曽の桟（かけはし）

国道19号線（木曽路）を走行中「桟」という道路標識を見ました。子供の頃教えてもらった歌の中に「尋ねまほしき園原や　旅のやどりの寝覚めの床　木曽の桟かけし世も　心してゆけ久米路橋……」[★13]という歌詞は暗唱しており懐かしく再確認しました。当初私

写真-3 桟部分の今日(かつてこの急崖の岩の間に丸太と板を組み、藤蔓等で結わえた姿でありました)

写真-4 桟の傍らにできた鉄筋の橋(1963年)

はこの「桟」は「架け橋」で川の対岸に向かって懸けられた橋とばかり思っていました。しかし、その後「急な崖にぶら下がるように造られた道」とか「絶壁に並行して横に架けられた橋」という意味であることを知りました写真-3、4。

木曽路におけるこの桟は古来旅人にとっては大きな障害でありました。かつて中山道一の難所「木曽の桟」を通過した芭蕉も子規もおののいたと言います。俳聖芭蕉は「桟やいのちをからむ蔦かずら」と詠み、正岡子規は「かけはしの記」中で「……見る目危き両岸の岩は数十丈の高さに劉りなしたるさまは一双の屏風を押し立てたるさま……」と述べ、絶壁に並行して設けられた桟通過の恐ろしさ難儀さについて「かけはしやあぶない処に山つつじ」などと詠んでいます。険しい岩の間に丸太と岩を組み、藤蔓等で結わえた桟は、かつては危ういものの代名詞として歌枕などに詠まれ、中山道一の難所とも言い伝えられてきました。一方木曽路にはこの種の桟が各所にあり、旅人を悩ませてきました。しかし「桟」をクリアすると、街道は風光明媚で変化に富み、豊かな森と水が与えてくれる力は、疲れを感じさせない旅を続けさせてくれる木曽路★14とも言われていました。

6
馬籠宿と「ふるさとのことば」

馬籠宿は中山道の最南端山口村にあり、島崎藤村の生まれ在所であり、名著『夜明け前』の舞台でもあります。かつての本陣島崎家の跡に藤村記念館が建てられております。馬籠宿を訪ねた折、木曽福島～上松～三留野～妻籠を経て馬籠への道をたどりました。福島から妻籠までは木曽谷の中でも山裾が少々拓けているが、妻籠から馬籠への道は、両側から迫る山腹斜面、生い茂る林木と雑木に覆われた長い長い山道の連続であります。峠へ辿り着くと、ようやくわずかに空が見えるような気分になるのは私だけだろうか? 妻籠から馬籠へたどる道は山また山、そして森林ばかりの木曽路という気持ちを実感します写真-5。

藤村は満９歳の少年の頃、草履ばきで馬籠を出て山また山の木曽路、そして「桟」を越えて江戸への道を辿っています。少年の頃の生まれ在所における記憶、その後上京するまでの木曽路における体験などは、その後発表された数々の作品に反映しています。

『夜明け前』は、はじめ「森林」と題せられるはずであったと新田★15が述べていますが、藤村が幼少時を過ごした故郷の環境や、私自身が最近妻籠から馬籠の山道を辿った体験などを通して、理解できるような気がします。『夜明け前』冒頭の文章は「木曽路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた」と記され、木曽路での様子を描いています。これも満９歳の藤村が上京する際、木曽路で体験し心に留めたこ

写真-5 藤村記念館

とに対する思い入れでしょうか？ 馬籠の記念館入り口で見た藤村のことば「血のつながるふるさと・心につながるふるさと・言葉につながるふるさと」というそれぞれのことばは忘れられません。

7
あとがきー南木曾災害に寄せて

本小文記述直後の７月９日、台風８号の接近に伴い、木曽路は１時間に70㎜の大雨に見舞われ、南木曽町読書の梨子沢においては17時過ぎ大規模な土石流が発生しました。ふだんは細い流れ程度の川でありますが、巨大な花崗岩の岩塊・礫が大量の水とともに、河川構造物、よう壁、河床の床固や河岸、橋梁等を破壊しつつ流下しました。その様子は凄まじく身のすくむ思いであった、と11日現地へ入った際に伺いました。町役場の報告によれば、一瞬の間に家屋全壊８軒・半壊等15軒・家屋浸水7軒、そして死傷者４名うち死者１名という痛ましい被災状況でありました。

梨子沢と読書地域は、近年、昭和41年（1966）、44年（1969）の複数回土石流の発生に伴う大規模災害が繰り返されており、国、県等においては、かねてより各河川の上流部において、堰堤等を造り防災に備えておりました。梨子沢本支流部における３基の砂防堰堤は、一定の機能を発揮していました。今回のような巨大な花崗岩体や、多量の礫を含む土石流体が梨子沢を流下した例は今日まで見たことがない、と地域の老人がつぶやいていたのも印象深いことでした。１時間雨量70㎜という異常豪雨の気候条件もあり、多量な岩塊や礫が流送されたものと考えられます。国交省の調査によれば、中央アルプス南木曾岳（1676m）直下の2箇所に山腹崩壊が確認され、今回の梨子沢土石流との関わりが取り沙汰され、なお調査中とのことであります。

最近は気候の温暖化に呼応するかのごとく、豪雨・地震等に伴う大規模な地盤災害が各地で発生しています。後氷期の地球史のうち、特に１万年～5000年前後の温暖期に形成され、今日まで安定していた再堆積地塊の地塊・地盤がしばしば不安定化し、挙動する可能性もあり、脅威であります。梨子沢上流域や周縁の地塊についても、その広がりや形成の経過・時期について認識する必要があります。昔も今も「木曽路は山の中」であり、そして「森と水」の力の大切さにも変わりはありません。しかし木曽路の自然と人の関わりは少しずつ変わりつつあります。居住域の転移・拡大、気候条件の変化とともに「災害も自然」から「社会化」しつつあり、地域における長い歴史共々、地域地盤の時間軸との関わりや防災方法等について思考してゆきたいものであります。

謝辞：本小文記載にあたりお世話様になりました、塩入信一、牧田一男両氏に厚くお礼申し上げます。

（平成26年７月12日執筆）

参考引用文献

★１ 木曽教育会（2010）；木曽歴史と民族を訪ねて、信濃毎日新聞社
★２ 手塚 順子（2013）；Japan漆Guide, 龍門堂
★３ 木曽平沢町並み保存会（2013）漆工町木曽平沢探訪マップ、平沢町並み保存会
★４ 日本林業技術協会（1998）；日本の森と木と人の歴史、日本林業調査会
★５ 中村三郎（2010）；森と水の力そして防災、神奈川県の砂防、神奈川県砂防協会
★６ 牧野 昇・大石 慎三郎・吉田 豊（1991）；ニッポン型環境保全の源流、現代農業
★７ 浅井 冽；信濃の国、長野県歌
★８ 木曽建設事務所（1986）；震災、長野県西部地震災害復旧の記録、長野県木曽建設事務所
★９ 長野県木曽建設事務所（1986）；長野県西部地震災害、長野県
★10 井口 隆、八木 浩司（2013）；長野県西部地震（1954年）で発生した御嶽山の大規模崩壊と岩屑なだれ、日本地すべり学会誌 vol.51, no.3
★11 中村 三郎（2004）；埋没谷、地すべりの地形・地質的認識と用語、日本地すべり学会
★12 中村 三郎・菅野孝美（2013）；縄文地塊崩壊幻視、砂防だより（神奈川）
★13 信濃の国、（前述）
★14 沢田 正春（1996）；木曽路ふたたび、郷土出版社
★15 新田 次郎（2011）；日本の街道、日本図書センター
★　木曽観光連盟（2013）；信州木曽町宮ノ越宿、観光協会
★　日義村役場（2000）；遠き夢朝日に翔けて、日義村